

## 家計簿の中の歴史

成田和子

### 水道が通った

昭和三十六年三月、一小の西側にあった教員住宅を借りした。

この住宅は、初め校庭の東側にあった三軒続きの住宅であり、私が子供の頃に、二つに分離して西側に移築したものである。

校庭に置かれた丸太の上を、ソロソロと動かして行った様子を、前の二階校舎の教室から見ていた記憶があり、それは昭和十二、三年頃であったと思う。

明治時代（明治四十二年築）からの建物は、ハメ板や敷居の古さはもちろん、四畳半と六畳と台所といった十坪半程度の家に、障子が十枚以上も使われているという造りで、冬は、炭火のこたつやプロパンガスのストーブを使っていたが、換気の心配がいらぬ程の状態であっ

た。

しかし東側にあった頃は、私が二、三年の時の担任だった先生や、兄や姉の先生方が住んでおられた住宅であり、そうした思い出を持つ故か、ぬくもりの感じられる家でもあった。

当時、住宅には水道がなく、校庭の西側にあった井戸の所から水を運ぶ生活であった。流し場の横につけられた蛇口からのもらい水である。先輩の先生方の話では、三十二年当時はこの水道もなく、職員室の裏の井戸からバケツで運ぶ生活だったそうである。その頃の一小は、校舎内の何か所かに水道が引かれている程度であった。

住宅での生活を始めた当時、水を運ぶのに使っていた蓋つきのバケツや、台所の水瓶だったホウロウ製の容器、ひしゃくは、今もわが家において当時の生活の様子を語っている。

福生町の水道の歴史をみると、昭和二十七年に簡易水道として本町、志茂二、牛浜の一部に工事を始め、二十九年八月より二七四戸への給水を開始したとあり、その頃はまだまだほとんどの家が井戸の時代である。

三十一年当時は、熊牛の町営住宅でも、四軒で一つの井戸を使う生活であったという。

一方三十年代は、一般家庭にも電気釜や電気洗濯機の普及が始っており、わが家でも電気釜と洗濯機を持ったが、水の問題が大変であった。当時の洗濯機はしぼり機式のものであるが、水の不便さもあって、すぎはタライ、脱水はほとんどが手、という状態であったように記憶している。

教員住宅に水道が引かれたのは、三十八年頃であったと思うが、長いホースを使って風呂桶に給水する作業もこの時点で終わっている。

三十年代は、福生に水道が引かれ、ひねれば出るという便利さ有難さを感じた時だったと思う。一部には、生ぬるい水だとか、ニオイがするといった不満も聞かれたが、水質の安全性の点が嬉しかったし、時には、「東京の水道の水よりも、福生の水の方がずっと美味しいんだって」といった声も耳にしていた時である。

四十三年三月八日の水道料金は、十一立方メートルで二八〇円（内、量水器使用料三〇円）であった。

### ほうきじゃないけど

「ほうきじゃないけど、ほうきみたいな物を買ったよ、と言ってますけど、何を買われたんですか？」と、娘を保育園に迎えに行くと、先生に聞かれた。掃除機を買った翌日のことである。昭和四十一年二月十五日、掃除機第一号を買った。

当時は共働きで、子供を保育園にお願いしての生活であり、狭い住宅ながら、「やっぱり必要よね」と話し合っていて、給料日の夕方に持ってきてもらったのである。電機店の御主人は、二つのメーカーの品を持ってきて説明した。選んだ品は東芝の一万三六〇〇円であった。

試しに使ってみるのを見ていた娘は、自分でも柄にさわってみたり、コードをしまい終ると、早速本体にまたがって部屋の中を回ろうとして叱られたり、三歳の娘はほうきから掃除機に変った夜を体全体で喜んでいた。

しかし「掃除機」という呼び方は、翌朝までには定着しなかったらしく、「ほうきじゃないけど……」との精一杯の説明になってしまったようである。

先生に掃除機を買ったことを話すと、「掃除機だったら、私の家でもこの間から使っているですよ」と言われた。

掃除機が一般の家庭で使われ出したのは、四十年代に

入ってからである。わが家でも買おうと決めた頃のこと、最近使い出したと話していた同僚に、「掃除機ってどう？」と聞いたことがあった。すると、「とてもきれいになる」との答えとともに、「吸う力が強いから、畳を傷めるんじゃないか」と話し合っていることも話してくれた。

三十年代に洗濯機が現れた頃は、布地を傷めることやボタンをもぎ取ることが心配されていたが、掃除機の場合は、畳の傷みや家具にキズをつける不安を話題にされながらも、新しい道具として喜ばれ珍らしがられつつ、次第に取り入れられていったように思う。

また、第一小学校で初めて何台かのテープレコーダーを購入したのは三十年代の終り頃であったが、最初は係りからの注意が厳しく、四十年に受持った子ども達と使った際にも、かなり緊張したことが当時の思い出の一つとして残っており、懐しい時代であったとおもう。

### スーパーが出来る

昭和三十三年、福生駅前にスーパーマーケットが出来た。マルフジである。初めて買物をした日、店内の明るさ、品物の豊富さに驚いたが、何よりも感じたのは、入口の所で備えつけのカゴを取り、品物を自由に選びながら廻って、最後にレジの所で袋を受け取るという方式の

新しさだった。

楽しいショッピングへ、街が大きく動き出した時だったとおもう。また店の前に置かれていた遊具で、十円入られてはガタガタ揺られる乗り物は、ニコニコ顔の子どもの姿がよく見受けられており、小さな子どもにとってもショッピングが楽しいものになった時期ではなかったろうか。

その後スーパー形式の商店が増え、店内に食堂を持つ店も出来て、休日などに家族でショッピングを楽しむことが、福生の町の中でも味わえるようになった。

しかし三十年代後半は、まだ肉は肉屋さんで、魚は魚屋さんでの買物も多く、豆腐屋さんには鍋やボールを持って買いに行っている。帰りに、「今夜は湯豆腐かね」と、同僚からの温かい冷やかしを受けたのもこの頃のことであり、街に買物かごが活躍していた時代でもある。

家計簿の中で、副食欄が、主としてスーパー名での記入に変っているのは四十五年からであり、農協を含めると六つの名前が出てきている。店名の印刷された紙袋が多く使われるようになってきたのもこの頃だったと思う。四十八年になると、西友ストアや長崎屋福生店も出店した。

## アメリカシロヒトリ

アメリカシロヒトリが、東側からも西側からもわが家にやってきて、その数が異常に多く、市役所や桑畑の持ち主に、お願いの電話をした記録が残るのは、四十五年九月一日から七日にかけてである。主人が、毛虫のバラバラ落ちてくる中で、桑の木伐りを手伝ったのもこの時であった。

広報ふっさには、アメリカシロヒトリについての記事が四十一年六月には出てきており、撲滅が呼びかけられているが、まだ各自での処置であり、撲滅方法の説明に終っている。

四十四年になると、町は消毒班を編成して公園などの消毒を実施しており、更に四十六年には、消毒器を家庭に貸し出すことも行っている。防除作業員募集が見られるのは四十七年であり、この頃には広範囲での防除が行われて、タンクをつけた車が市内のあちこちで見受けられたが、この光景は五十年代にも続いている。アメリカシロヒトリには随分悩まされたが、今は思い出のなかの虫である。

## 曲りを持つ道

曲りを持つ道の拡幅舗装工事が行われたのは、四十八

年である。市役所からの通知や、私の記録を見ると、話が具体的に進められたのは四十七年三月からであり、わが家も拡幅のための用地買収問題を経験したが、四メートルの舗装道路の完成はうれしいことであった。今は車が走り、人びとが往き来する立派な生活道路である。

しかしこの道も、戦前はハケ上の畑とか、富士塚の畑などと呼ばれていた麦畑や桑畑に通じる農道であった。

大八車やリヤカーの通っていた草道である。

敗戦後、横田基地の工事にとまなう砂利採取によって、ハケに続く多くの畑が消え、同時にこの道も姿を変えた。

砂利の採掘跡は学校とグラウンドになり、後に校舎の増築（三十三年）や、プール施設建設（三十五年）などによる用地の拡張を経て、更に曲りのある道に変わったのである。

曲りを持つ道、この道も一つの歴史を語る道である。

## 富士塚

富士塚の畑の呼び名があったように、かつては富士塚が牛浜にも存在していたのである。

現在でも富士山の眺められるハケ上、すなわち字武蔵野二四五一番地清岩院所有の土地（現市民会館敷地）に築かれ、塚は亀甲形で高さは三・六メートル余り（一丈二尺）あり、松の古木が一株植えられていたという（福

生村誌稿参照)。

創立は未詳とあるが、富士塚は高田富士といわれる塚が安永八年(一七七九)江戸高田(新宿区西早稲田一丁目)にあった水稲荷神社の境内に造られたのが最初といわれ、江戸中期から明治初期にかけて多く築造されたといわれており、更に市内の長徳寺に天保十二年(一八四一)に造られた富士講碑があることから、この塚も江戸期のものではないかと考えられる。

福生村誌稿によると、富士塚には浅間社が祀られ、祭神はコノハナサクヤヒメ、野口神官によって祭事が行われていたと記されているが、現存する祠には、高さ三センチ程の石の仏像が祀られている。塚が清岩院の土地に築かれ、祠に仏様の像が祀られている事実と、浅間社との関係については、山岳宗教あるいは神仏混淆、神仏分離等の時代的な背景との関連もあるのではないかと考えられ、私の浅い知識では判明しきれない問題である。

しかし、富士塚が敗戦時までであったことは事実である。戦後、米軍による砂利採掘が行われた際、塚のすぐ近くまで積み上げられた土を見て、「このままでは危ない!」と感じた笹本重一さん(牛一在住)が、急いで祠を自分の畑(市民会館辺)に移し、土盛をしてその上においた後、昭和二十三、四年頃に祠と仏像をカゴに入れ、小学生だった息子さんと背負って清岩院に運んで行かれ

たとのことである(笹本さん父子談)。

敗戦後の混乱の中で富士塚は跡形もなく消えたため、現在では塚の跡さえ見ることとはできないが、笹本さんによって守られた祠(木製)は、その後傷みによる修復を受け、現在も清岩院の境内に祀られている。

### 二年三か月待った電話

昭和四十三年三月、現在の場所に移り、電話は必要だからと、落着くとすぐに申込みに行ったが、その時受け取った「電話加入受付証」が残されていた。

「昭和四十三年四月三日 受付番号 福生五十一・四」である。

当時はなかなか電話が引かれない事情があっただけか、その受付証の五頁目に「電話をおつけする順番は」との項目があり、第一位は「官公庁、学校、病院、大規模な会社、工場などの申込み」とあり、第五位に「住宅用電話のお申込み」とある。

その後連絡がないので聞きに行くと、希望者が多いので局内に何かを増設しない限り、無理であることが説明された。

電話取付工事が行われたのは、四十五年七月十日であり、七月十七日には自治会館において、多くの人を集めての「電話架設について」の説明と、支払いや電話債券

の手続き等が行われている。当日支払った架設費は四万四七九一円であり、二年三か月待って、やっと届いた電話であった。

### 地価が上った

「月給で二坪位買えた土地が、今では一坪も買えなくなりましたね」と話したのは、四十七年十二月にカラーテレビに替えた時だったと記憶している。電機店主に、「土地が高くなりましたが、この辺りですか?」と聞かれての返事である。近所の土地が、坪十何万だとか、二十万を越えたらしい等の噂を耳にした頃であった。

四十年代始めは、この辺りの土地は坪二万から三万円前後であり、サラリーマンの給料で二坪位は手に入れた計算である。

四十四年三月、私は二十一年間勤めた一小を辞めているが、最後の給料袋を見ると、支給額は五万六七九〇円である。

また家計簿の支出欄を見ると、四十一年一月「かつ五十円」三月には「ほうれん草二十五円」があり、外食のめん類なども一〇〇円程度で食べられている。更に、主食と副食との月合計額の面で見ても、四人家族で、四十四年二月が二万一千八百三十三円、四十七年が三万三千三百三十九円、四十九年で四万六千七百八十四円、五十年が六万三千五百四十九円と

なっている。

四十年代は、国の政策や人びとの迷惑により、地価がより急激な高騰を示した時代であったと思う。

### ネズミとり

昭和四十五年十月十二日の支出欄に「ねずみとり二五〇円」の記入がある。四十二年秋に工事を始めたが、家を建築中からネズミがいることは聞いていた。翌年住むと同時に台所に出没し始め、ついには二階に上ってえのぐをかじる始末に、道具を使つての捕獲作戦となつたのである。

四十三年当時、野球場の周りは生垣であったし、道路は砂利道であった。近くを通る八高線には、東京最後の汽車が煙をはきながら走っていた。庭の土はモグラによつて時々持ち上げられたし、ガマ蛙の訪問もあった。

数十センチもある横しまのヘビが庭にいた時には震えたが、アマガエルの声には情緒があつたし、セミ達の合唱にも趣があつた。

畑も草むらも減り、蝶の姿も減ってきたこの頃である。

### 図書館が出来て

昭和四十八年の春頃だったろうか、「お母さんもうらっしゃいって」と、図書室から帰つた子どもに言われ、

数日後に福祉会館二階の図書室へ行った。

「とても楽しいよ」と娘が言うとおりの、一部屋だけのせまいものだったが、工夫された雰囲気や職員の方の説明には熱意があり、その後も訪れるたびに読書への刺激が感じられた。

福生図書館は四十七年七月に図書室としてオープンしている。

三階の部屋を使って、四十八年九月十七日から「幼年期の読書教室」が開かれた。幼児期の読書環境と小学生になってからの読書姿勢との関係については、以前から感じていたことであり、この講座の開催はとても有難いと思った。

斉藤尚吾先生を講師に翌年まで五回ほど開かれたが、毎回ゆさぶられる思いであった。

また十一月三日の文化祭での図書館主催による、第一回講演田島征三さんの「絵本について」の話は強く心に残った。以来毎年、文化祭には講演が行われ、中味のあるお話を聞かせて頂いている。

四十九年度も、読書教室や読書会がたびたび開かれ、「ちからたろう」や「ねずみじょうど」を題材に、職員と母親たちとの勉強会も持たれた。

熊川で、一人のおかあさんが家庭文庫を開いたのは四十九年二月であり、五十三年には個人の家や会館を使っ

ての夏休み子供図書館も開かれるなど、五十年を中心とした数年間は、積極的に行動する熱心な市民の動きも多かった時である。熊川団地のおかあさん達の行動も非常に活発であった。

四十九年三月四日と十八日に開かれた、代田昇先生を講師とする「少年期の読書教室」には、図書館が託児所を設けて多くのお母さんの参加を呼びかける等の取り組みも行われている。市内だけでなく、東村山の電車としよかんの見学や昭島図書館の「絵本展」の見学も行われ、また、松本新八郎先生の「民話」についての文化祭講演や大石真先生のお話など、この時期にも何人もの作家や文学者のお話を聞く機会が作られている。

五十一年二月にも「子どもの読書と図書館を考える」をテーマに五回の教室が開かれるなど、月に一、二回の割合で教室や話し合いが開かれる活発さであった。

五十年八月二十一日府中市市民会館に於て「親子読書研究会」が開かれ、私も参加したが、四十年代五十年代は、全国的にも子どもの読書問題が取り上げられ、取り組まれた時である。

しかし、福生の図書館は特別だったと思う。最初の頃だったが勉強会の際に、福生市にいくつの図書施設が必要であるかを、印刷物を使って説明されたことがあった。

たしか、市民と図書館の位置との関係を説明するため

に、市の面積や人口との関係を図示したものであったと思うが、その時の職員の方の「いかにしたら、市民が図書館に目や足を向けてくるか」を熱っぽく話された姿は、今も心に残っている。開館当時の職員の方々が示されたあの熱意と努力が、現在の中央図書館を軸とした、施設や活動を生んだように感じている。

### 水洗になった

市の下水道工事は、昭和四十八年から始まり、五十二年六月から供用が始まったと広報に書かれており、私の住む地域で行われたのは五十四年である。

ちようど家の改築工事が行われており、大工さんや水道屋さん達と水洗トイレを何式にするかを話し合っている時、お湯や温風の出るウォシュレットの話聞いた。

この時は、紙を使わないでも済むというトイレの話は驚きであった。初めてウォシュレットに接したのは、北田園の友人の家で五十九年十月であったが、加美平の友人宅では五十八年には使用していたとのこと、福生でも五十年代後半には普及し始めていたようである。

わが家も平成元年には導入したが、振り返ってみると、汲取り式に始まり、現在の家でのクリンントイレ、普通の洋式トイレ、そしてウォシュレットと四つの過程を経ている。トイレの進歩は、非常に大きかったと思う。

私が育った昭和初期、福生では普通の家庭はもちろん汲取り式であり、新聞紙を切るのが小学生の頃の一つの仕事であった。当時はほとんどの家が新聞紙や雑誌であり、浅草紙など使う家は特別であった。しかし、三十年代には白い紙が使われるようになり、新聞紙の利用は終わっている。

借りていた家は、普通の汲取り式で子どもの落ちる心配があったため、家の建築に当ってはクリンントイレを採用したが、やはり危険性は残っており、水洗化は待たれる工事であった。

下水道工事の説明会が五十三年十月三十日に市民会館で開かれ、申告書を翌年二月十日に提出している。水道管を太くしたり、植木を移動させたりした後、本格的に工事が進められ、感激の水洗トイレの使用が始まったのは、六月二十三日であった。

受益者負担金は、三万四三五〇円であり、下水道料金の支払いは十一月より始まって、上水道が四〇〇〇円、下水道一四五五円と記録されている。

料金についてみると、汲取り時代の三十八年当時は一タ四〇円と量よっての計算であり、四十三年頃は一人一か月五〇円としての計算であるが、四十五年四月よりは無料となっていた。

トイレの思い出は、子ども時代と教員時代にお世話に



なった福生一小にも残っている。木造校舎時代は、渡り板（スノコ）を渡って行く場所に建てられており、東便所、西便所などと呼ばれていた。古い校舎に付設の西便所や裏便所の女子用トイレは板張りで床が高く、丸見えの便槽は大きく連っていて怖さや不気味さがあった。

二階建校舎のトイレは新しいため、床もコンクリートで低かったが、便槽の怖さは同じであった。

上履きを落としたりとベソをかく子どもと一緒に長い棒を探し、やっと拾い上げて井戸端で洗った日のこと、授業中に「便所へ行ってもいいですか？」と聞く子どもに、「紙はあるの！」と思わず聞き返した時のことなど、備え付けの紙など置かれていなかった時代の思い出である。昭和三十九年、一小の校舎は鉄筋に変わり、トイレも校舎内に入って水洗となり、ボックスごとトイレットペーパーも置かれるようになった。不潔さも、落ちる危険も、外部からの犯罪の不安も、やっと解決された時代である。

### リヤカーで収集

昭和四十三年のゴミ（塵・厨芥）取扱手数料領収書を手にした時、リヤカーを引くおじさんの姿が浮かんできた。三十六年当時は、チリンチリンの鐘とリヤカーが使われていたのである。三十三年から武蔵野台に住む友

人の話では、自転車にリヤカーをつけてドラム缶を乗せ、鐘を鳴らしながら週に何回かやってくるおじさんがいて、生ゴミを各自であけていたそうであり、三十一年より熊牛で生活した友人の話でも、やはりリヤカーと鐘の記憶が出てきている。また子ども時代の記憶の中に、リヤカーと鐘の音と、臭と、道に残された水（汁）の様子を持つ人もおり、リヤカー時代はかなり印象的だったようである。

福生の町でゴミの収集を始めたのは昭和二十七年であり、当時は本町と志茂と福生、牛浜の一部だけを二人のひとがリヤカーで廻り、豚の飼料に使える台所の生ゴミだけを集めていたそうである。

三十六年に町は特別清掃地区の指定を受け、町の浄化とゴミ収集に本格的に取組んでいる。六月十日発行の町の広報は、厨芥収集について鈴を鳴らしたリヤカーで各地とも毎日巡回、とまる場所も時間も順路も大体一定しているのを待っていてリヤカーに投入するようにと書き、雑芥収集は、一般家庭は十日に一回位で、作業員が各戸毎に集めて廻るので、見やすい場所に置くようにとある。当時わが家でも、その雑芥用のコンクリート製のごみ箱を買って入口近くに置いていたが、その頃は生ゴミ以外は余り出なかったうえ、休日などには庭でたき火をしたりしたため、あまり入れる物がなかったことを記憶して

いる。

この年、町の清掃条例が公布され、ゴミの容器には町で交付する標識（ステッカー）を貼ることや、汚物の投棄禁止などが決められている。塵芥処理にはダンブカーが使われているが、厨芥はやはり毎日リヤカーで収集しており、三十六年はダンブとリヤカーの併用時代であった。収集用自動車をもっと一台購入したことや、近く全面的にオルゴールつき自動車でも厨芥収集を行う予定であるとの記事は三十九年七月である。

料金は月額八〇円で三か月ずつ年四回（二、五、八、十一月）役場係員が集金しており、四十四年十一月まで家計簿にも記入している。

指定場所での厨芥の容器収集は、三十九年十月から始っており、この頃がゴミ収集大型化の幕開けである。決められた場所に出して置く方法で、ポリバケツにステッカーを貼りマジックで名前を書いた時代で、この時点で全面的に自動車収集に変っている。

混合収集、つまり塵芥と厨芥を一つの容器で出せる方法に変ったのは四十年八月からであり、西多摩衛生組合の塵芥焼却場の完成によって、初めて現在のような出し方が可能になったわけである。

不燃物は金曜日と決められ、毎週指定場所に出せるようになり、便利さが増したのに反して、収集場所の乱雑

さが目立ってきたと呼びかける文は四十二年六月に出ており、翌年は危険物の収集は木曜日で、ステッカーを貼らない容器は処理しないことや、多量のゴミは特別料金が必要であることなどを知らせている。四十六年になると、ゴミを紙袋で出す人や夜間に出す人がいて、収集場所が散らかる事を報じており、「ゴミ戦争」という言葉が使われるようになった四十七年には、増加するゴミの量を問題視し、またプラスチックゴミが有害であることや、ゴミを減らすための課題を強く訴えている。

ダストボックス収集を、現在の地域で短期間経験したのもこの時期であり、市指定の紙袋がお米屋さんで売られたのもこの頃である。

新しい塵芥処理場が瑞穂町に造られたのは四十八年であり、四十年代は人口増に加えて、生活様式の変化や人びとの意識の変化が、大きなゴミ問題を生んでいった時期であったと思う。そして五十年代六十年代と改善できないまま悪化し、昨年からは資源ゴミの回収も始められたが、十分な解決策は見出せないままである。

人びとが毎日の生活の中で出すゴミでありながら、人びとの生命をも蝕む危険につながることを考える時、ゴミは最も身近かで、最も大きな問題であると思う。

「家計簿の中の歴史」は、家計簿の中の記録と心に残

る思い出とを中心に、町の広報や知人の助言を頂いてまとめたものである。

家計簿は昭和四十一年から（四十二、三年欠）であり、内容的にも大したものではないが、その頁をめぐりながら、長い時の過ぎていたことを感じた。

かつてリヤカーで集められていたゴミは、今や地球規模の環境問題の中で大きな課題となり、水道の有難さに感動した住宅の跡は、広い駐車場に変わっている。

「ニャンニャンがはつきり言えるようになった」とある日の日記に記されていた息子も、今は社会人である。

（なりた・かずこ 元福生第一小学校教員 福生在住）